



!

オープン・イノベーション

Open Innovation

||

自社だけでなく
他社や異業種・異分野のアイデアや技術を組み合わせ
新しい可能性を生み出す

特集 2020.11.23 開催 tsumiki オープンイノベーションセミナー
「オープンファクトリー五感市」に学ぶ

企業連携が生み出す 新しいビジネスの可能性

地域経済の活性化に向けて「オープンノベーション」という手法が注目されています。異業種・異分野の技術、アイデア、サービス、ノウハウなどを組み合わせることで、地域に新たなビジネスモデルが生み出されています。そこで2020年11月23日、地域産業にイノベーションを創出するオープンイノベーションセミナーを開催。地域のものづくり企業の連携により生まれた「オープンファクトリー五感市」実行委員会の佐々木優弥氏をゲストに迎え、地域産業における新たなイノベーションの可能性についてお話していただきました。

取材・文 葛西淳子

Guest

佐々木優弥氏

(有)翁知屋代表取締役
オープンファクトリー五感市実行委員会

岩手県平泉町にて伝統工芸「秀衡塗」の製造販売。2014年から県南地域のものづくり企業を集めた「いわて県南エリア伝統工芸協議会」を結成。初代会長を務める。2018年東北初となるオープンファクトリー「五感市」を中心となって開催。2020年にはオンライン五感市を開催。

五感市から、地場産業を発信する

五感市は、岩手県南の地域産業会社をオープンにし、来場者に多様な企業を巡ってもらい、岩手県南地域の特色のある産業への理解とファンを増やすことを目的にしています。また、日本全国からお客さんが来県し広域のエリアを巡ることで、名勝遺跡や観光施設にも立ち寄り、温泉旅館やホテルなどに宿泊、郷土料理などの食事処、小売店などへの波及効果が見込まれます。企業同士のつながりや周遊イベントを企画することで、低迷している地元地域経済の活性化も期待できるのです。

これまで先進地というと東京などの大都会をイメージしていたと思うのですが、これからは課題を抱え困っている地域にこそ、魅力と楽しさを求めて全国各地から若い人たちがやってくる。その地域で自分たちが思い通りに活動できることが先進地だと思っています。それを叶えるための一つの手法として、五感市という手を打っているのです。そして来場者が、また来年も来たいとリピーターになり、訪れた市町が第二の故郷として感じてもらえるようなイベントにしたいと活動しています。

地域産業への「危機感」と 先進地域への「興味」を共有

平泉町で秀衡塗漆器伝統工芸を中心に製造販売していますが、このままだと、売り上げも下がり、自分の仕事がなくなるかもしれない。また地域に目を向けると、人口も減っているし、後継者も育たない、この地域は将来的にまずいことになるという危機感をもっていました。そこで、県南地域のものづくり企業や県に働きかけ、2014年「いわて県南エリア伝統工芸協議会」を結成しゼロベースで組織づくりをしてきました。まず、成功している地域では何をしているのだろう、そして地元岩手県南で何ができるのだろうと思い、仲間を連れて先進地視察を行いました。全国12カ所ほど周りましたが、現地に行き直接話を聞いたり、体験してみたりすることで理解が深まりました。同時に、国内外で突出して活躍している多種多様な専門家たちから学ぶ「伝統工芸未来塾」という勉強会を開きました。いろいろ教えてもらったことは、自社でも試したくなり刺激になります。

五感市は、最初は自社の翁知屋工房をオープンにすることから小さくはじまりました。2016年お試しイベントとして「平泉五感市」を5、6社くらい集めて開催。翌年参加企業が増え、自分たちが案内する立場とお客さんの立場の両方を経験するイベントを実施しながらオープンファクトリー型を試しました。そして2018年11月、東北初となる第1回「オープンファクトリー五感市」開催。来場周遊者2000人。一関市、平泉町、奥州市の地場産業企業26社参加。2019年に行なった第2回五感市は、来場周遊者が4000人となるイベントに成長しました。運営は役員企業10社が中心となり、岩手県県南広域振興局の担当職員も関わっています。予算は、五感市実行委員会25社程、岩手県、平泉町、奥州市、スポンサー企業からの協賛。自分たちで課題をみつけ、自腹を切って資金を出し、お客さんを集め、自分たちでイベントを仕掛けていく理想的な運営方法だと思っています。

「オープンファクトリー 五感市」

オープンファクトリー五感市は、岩手県南地域の一関市・平泉町・奥州市の3つの地域にある、伝統工芸など地域産業の「ものづくり」の現場を一般の方に見学・体験してもらうイベントです。「視」現場を見て、「嗅」においを感じて、「聴」音や声を聴いて、「触」質感・温度を感じて、「味」味わって、環境まるごと「五感」で感じ、楽しめます。

<https://gokan-ichi.com/>



今だから産地と人は密になれる。 リアルからオンラインへ

2020年は、来場者1万人を目指して準備をしていたとき、新型コロナウイルス感染拡大の影響でイベント開催の見直しを余儀なくされました。そんな中でも共に歩んでいる前向きなメッセージを伝えようと、オンライン五感市は、6月にプレ企画を、10月に本番を全国に先駆けて開催することを決めました。テーマは【産密】今だから産地と人は密になれる。この時期に、なかなか秀逸なタイトルだったと思っています。一関市、平泉町、奥州市の地場産業企業15社が参加し、各企業は、自社でYouTube動画製作、ZOOMやInstagramで、生ライブの工房案内や職人トークなどを実施。WEB訪問者6600名、閲覧者数10000PV (Google アナリティクス)。実際に運営し

てみると、Wi-Fi環境のトラブルがあったり、なかには予想外れとなった企画もありましたが、大した問題ではありません。バーチャルツアーには、アメリカロサンゼルスから40名程の参加者があり、将来コロナ感染が収束した際には訪問先として選んでもらえる可能性も見えてきました。各社で動画・生ライブするための撮影・編集技術を習得したことで、世界に発信できる手段を得ることができたと実感しています。

地域を盛り上げるためには、地元に住んでいる老舗や企業代表や地域のリーダーが楽しそうにしていることが一番です。自分の住んでいる地域に自信をもって、地域産業や資源の良さをどんどん発信していくことが大事だと思っています。

利府の地場産業の可能性

利府町には、特色ある魅力的なものづくりを行っている企業が多くあります。これまで「つみきのモチ」の中で、町内の熱い想いを持った経営者や事業者、真剣にものづくりに励む現場の職人、社員等を紹介してきました。しかしながら、実際に直接その現場に触れる機会は限られています。「オープンファクトリー五感市」のように、ものづくりの現場を一般に開放する工場見学のプログラムを試みる

ことで、利府のものづくりの魅力を知ってもらう第一歩になるかもしれません。また、ゲストの佐々木さんは、「平泉町では、五感市という方法を使っているが、その地域ごとに適した手法を見つけて試して欲しい」と話していました。今後、利府町の特性に適した“オープンイノベーション”に取り組むことで、町内産業の魅力が向上し、次世代を担うものづくり人材の確保につながることを期待されます。

参加者の声

- 他の地域の活気ある取り組みを知ることができてよかった。
- 利府では、どんなことができるか考えさせられた。
- 大人が本気で楽しく取り組んでいる姿を、若い世代に見せることが重要だと思った。

利府町のんびりまち歩き

町民バス「りふっと」でGo!
バスで巡る小さな旅

旅人・案内人●tsumikiスタッフ 高橋知也

利府町公式キャラクター「十符の里の妖精 リーフちゃん」が描かれた町民バスりふっとに乗って、tsumikiがある利府駅前～須賀入口バス停の区間を探索してきました。

スタート!

利府駅前

2020年にロータリーが一新された利府駅前バス停からスタート。町民バス「りふっと」は、リーフちゃんが描かれた黄緑色のバスと、虹やてんとう虫などが描かれた水色のバスの2種類があります。町内を走る姿を、見つけてみてください。

利府郵便局前

利府交番前

利府町役場

エキサイゼン病院

利府中学校前

利府中学校の前には、文化交流センターリフノスが建設中。2021年7月のオープンが楽しみです。また、中学校の裏手には利府城跡や館山公園など名所もあり史跡巡りもできますよ。

新堀

堀川・石田住宅前

この辺りからは、車窓の左右に梨園の風景を眺めることができます。4月初旬頃から白い花が咲き始めます。名付けたとしたら「梨の花ロード」でしょうか。

利府第三小学校前

梨ヶ丘団地入口

バスは坂道を登り、途中利府城跡がある山や遠くにグランディ21や泉ヶ岳などの山々を一望できるスポットを眺めながら、梨ヶ丘団地入口バス停に到着。そこには巨大な機械が! 気になり近寄ってみると、コイン精米機と8種類のお米が買える自動販売機が並んでいました。

デカイ! お米の自販機! /

千賀の谷入口

ゴール!

須賀入口

ゴールは海が見えるバス停、須賀入口です。バスを降りると、目の前には民宿ハーバーハウスかなめがありました! 事前予約をすれば、松島湾での体験漁やマリンスポーツ、バーベキューなどが楽しめます。

利府町は自然豊かな町です。僕は20年近く利府町に住んでいます、いつもと違った交通手段で梨園や街並みを眺めるのもいい体験でした。皆さんも、りふっとに乗って利府町バスの旅にいらっしゃい!

とふ 十の 里びと

14人目

-お名前

さくらい ぎいち
櫻井儀一さん(73歳)

-なにをしているひとですか？

利府町でこだわりの米づくりを行う
米農家の職人です。



こだわりの伝統農法でつくる 自然乾燥米

利府の農産物といえば「梨」がとても有名ですが、梨の他にも米や季節の野菜が栽培されており、利府の土壌の性質を活かして育てられた豊かな味わいが特徴的です。米の専業農家として昔ながらの製法を守り続けている櫻井儀一さんに、米づくりについてお話を伺いました。

豊かな自然環境と惜しまぬ手間で育つ滋味深い米

利府町の米農家櫻井儀一さんは、現代では数少なくなった自然乾燥で米づくりをしている米農家のひとりです。現代の一般的な米づくりは、稲を刈り取った後は乾燥機を使って短時間で米を乾燥させるのが主流です。自然乾燥米とは、刈り取った稲束を田んぼに立てた棒に掛けるなどの方法で、1ヶ月程かけてじっくりと天日干して乾燥させたお米です。乾燥する過程で追熟が起こることで、甘みが増すと言われています。

利府小学校前の利府街道を望む、櫻井さんの田んぼには、惣の閼源流から広葉樹の腐葉土によるミネラル豊富な水が注がれていて、お

いしい米が育つもうひとつの理由となっています。

米農家の長男として生まれた櫻井さんは、高校を卒業した頃から本格的に家業を手伝い始めました。農業機械がなかった時代には、田植えなど農繁期の農作業を短い期間で完了させるために、兄弟や親戚、地域の農家同士が協力し合い、それぞれの田畑の農作業を手伝い合いながら行っていました。

耕地面積が少ない利府町では梨作りが盛んですが、櫻井さんの家でも、父親の代までは梨を栽培していた時代があり、梨の出荷を毎年楽しみに待っているお客さんに届けるため、収穫した梨をリヤカーに積んで塩亀や仙台近郊まで売りに行っていたという話を聞いたことがあるそうです。

昔ながらの美味しさを現代につなぐ

毎年米づくりは、彼岸明けの3月下旬から始まります。トラクターでの田おこしに始まり、代かきを経て、5月15日頃に田植えをします。田植えが終わってからも稲の生育を観察しながら、適宜病気から守るための薬かけや追肥などを行い、9月下旬から10月にかけて稲を刈り、棒掛けで自然乾燥。乾燥した後は脱穀作業、籾すり、出荷と続きます。

櫻井さんの田んぼは、水が溜まりやすく、ぬかるんだ土壌のためコンバインを入れることができません。そのため、機械は使わずに稲を刈り、立てた棒に稲束を放射状に積み上げる「棒掛け」という方法で自然乾燥し、土壌に合わせた米づくりを行っています。この自然乾燥法には、いくつかの種類があります。日当たりが良い田んぼでは刈り取った稲束を田面に直接立てる「束立て(そくたて)」、日当たりが悪い田では稲束を横棒にかける「はせ掛け」、水はけが良くない田では「棒掛け」や「はせ掛け」など、その土壌や風土などの条件によって干し方は異なります。

昔はどこの田んぼでも見られた光景ですが、収穫時期は秋の長雨、台風など、天候に大きく左右されます。また、多くの人手も必要となることと機械化が進



▲利府街道ができる前の利府小学校(写真Aの建物)昔の棒かけの様子、田んぼにぼつぼつ並んで見える。写真・利府町教育委員会提供

んだこともあり、現代ではあまり見られなくなりました。

新たな地でこれからも伝統農法を続けていく

区画整理によって、今年から利府小学校前の田んぼでの稲作はできなくなり、利府駅近くの田んぼにて米づくりを行うという櫻井さん。今後も自然乾燥米作りを続けていくそうです。「ものづくりは、何を作るのでもこだわりのないといけません。農家の職人にならないとね。体力が続く限り米は作るよ。30kgを担げなくなったらダメだけどね」と長年の農作業で鍛えられた身体と技術には自信があります。

今年の秋には、電車の窓から刈り取った稲を自然乾燥させる、棒かけの風景を見ることができるようかもしれません。

取材 五十嵐千晶
文 tsumikiライター 櫻井陽子

利府町で活躍する事業家を毎号紹介していきます

十符(とふ)とは？ ……昔、利府町の湿地帯には、良質な菅(スグ)草が生じ、「菅藁(スガコモ)」と呼ばれる敷物が作られていました。その菅藁の編み目が10編あることから「十符の菅藁」と呼ばれ、みちのくの「歌枕」としてもうたわれていました。これが、「十符の里」「十符の浦」と呼ばれるようになり、十(と)が利(と)に、符が府に変わったと言われています。

— CHALLENGER —

ハンドメイド布小物 iiko iiko
いゐぶち ゆきこ
岩渕有希子さん



—— 「欲しいものが手に入らない」から始まった手づくり

岩渕さんは、布小物を作っています。屋号の「iiko iiko」は、子どもを慈しみ「いい子いい子」と頭を撫でてあげるイメージです。tsumikiで開催する「こ・あきない市」出店や「こ・あきない塾」受講を経て、2020年秋にtsumikiの委託販売にチャレンジしました。作品づくりのきっかけは、子育てをしている時、子どものよだれが多く、スタイ(よだれかけ)を替えてもすぐに汚れるので、何枚あっても足りなかったこと。長く使える吸水性が高いスタイを探しましたが見つからず、自分で工夫し手作りしたのが始まりでした。だから、スタイは触感、吸水性、速乾性、着けた時の重さのバランスにこだわって作っています。「1人目、2人目の子の時は我が子用のみでしたが、3人目が生まれ、その子の分を作った時、困っている人が他にもいるかもしれないと思うようになり、販売することを考えました」と自分のためのものづくりから、誰かのためのものづくりへと思いが広がっていきました。

—— 思うように運ばないことも、それでも道はつづいている

「誰かのために」と思い始めたものの、どう進み出せば良いかわからずにいた頃、tsumikiの「こ・あきない市」への出店の機会を得ました。他の作家たちにも刺激され、もっとステップアップしたいと「こ・あきない塾」へも参加しました。作家さんたちとのつながりも生まれ、イベント出店が決まるなど、活動の道筋が出来てきました。しかし、動き出そうとした矢先に新型コロナの影響が出始め、出店予定が次々と消えていきました。落胆の思いを消し切れないまま何かできることをと考え、手元にあったガーゼ生地を活かしてマスクづくりを行いました。そのうち夏頃になると、ようやくイベント参加への誘いが来るようになり、自分にも戻れる場所があるのだと嬉しく感じたそうです。

—— 手にした人も、作り手も楽しいものづくりを目指す

手作りマスクは好評で、注文も増えました。しかし、ある時「私、本当はマスクを作りたいのかな？」とハッとしたと言います。「少数のニーズでも、誰かの『こういうのが欲しかった！』を叶えるものづくりも大切にしたい。一方で、自分が作りたいものを作る楽しさも忘れたくない。」と使い手・作り手両方が楽しめるものづくりへと希望が膨らんでいきました。そのひとつとして、tsumikiスタッフと相談し「iiko iiko」らしさに地域性をプラスという発想で製作した梨巾着が生まれました。「今後は、スタイやマスクもおしゃれなデザインにチャレンジしたいし、小さなお人形や小物も作りたい。親子で参加できるワークショップや販売にこだわらず、見て楽しめるような出店方法も楽しいかも！」と目を輝かせて抱負を語ってくれました。

取材・文 tsumikiライター 五十嵐千晶

“「あったらいいな」をかたちに。
「つくりたい」をもっと自由に。”

— INFORMATION —

ハンドメイド布小物
iiko iiko(いいこ いいこ)
岩渕有希子
☎ 090-8255-1220
@iikoiko__



tsumiki TOPIC



【 利府町の美味しいもの紹介 森の中のカフェ生石庵 】



生石庵は、森郷にあるカフェです。森の細道を進んだ湖のほとりにあり、ゆっくりくつろげる空間です。2019年の台風被災以降、実店舗は休業していますが、ネットショップやtsumikiのセレクトショップ(委託販売)を中心にコーヒーターストの販売を継続しています。なかでも、イタリアの伝統的な郷土菓子「ビスコッティ」が人気で、東北ならではの「はや」味をはじめとした豊富な種類のビスコッティは新聞等メディアでも取り上げられました。秋季限定の「利府梨のフィナンシェ」は、利府梨を使用した地域性ある新

しい逸品。「食前に軽くオープンにかけるとカリッとした独特の食感になるですよ」と店長の松田献さん。冬期は、レモンクッキー、ビターチョコクッキーなどの焼菓子や、クリスマスやバレンタインシーズンに用意したギフトボックスが好評でした。その他生石庵ブレンドなど各種コーヒーマ、ネットショップでお求めいただけます。

森の中のカフェ 生石庵
(実店舗休業中)

☎ 050-3558-0149
https://oishian.shop-pro.jp/

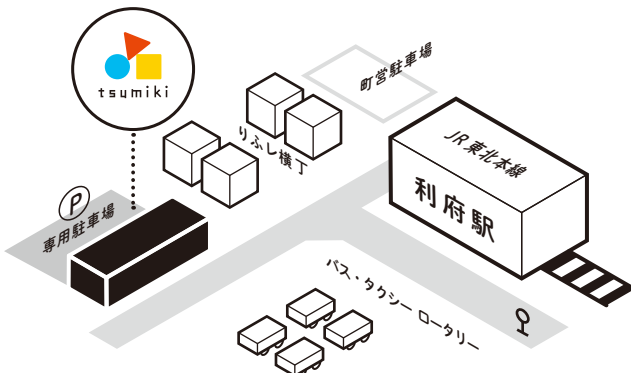


tsumiki
利府町まち・ひと・しごと創成ステーション

利用時間
9:30-17:30
(水・金曜日は21:00まで開館)

休館日
火曜日・年末年始

〒981-0104
宮城県宮城郡利府町中央1-5-2
TEL 022-766-9231
FAX 022-766-9232
Email info@rifu-tsumiki.jp



設置運営 利府町(秘書政策室 政策班)

利府町では、地方創生に向けて良好な住環境に「ワクワク感」をプラスした魅力的なまちづくりを進めています。秘書政策室政策班は、地方創生の総括部門として「利府ならではの」シニセールズ政策や、移住・定住政策などに取り組んでいます。

管理運営(業務委託者) 一般社団法人Granny Rideto

Granny Rideto(エスペラント語)は、日本語で「おばあちゃんの笑顔」と訳します。これから高齢化社会を迎える中で、おばあさんになっても笑顔で暮らせる社会をつくりたいという意味が込められています。同時に「Granny」には「おせっかい」という意味があり、地域のおせっかいをやく役割を担うという意志が込められています。

公式ウェブサイト
rifu-tsumiki.jp

Twitter
@rifu_tsumiki

Facebook
<tsumiki>で検索

Instagram
@rifu_tsumiki

「つみきのキモチ」は、利府町内を中心に隣接する市町村の公共施設、カフェ、店舗などで配布しています。

つみきのキモチ vol.14 発行日●2021年3月25日 発行●利府町
企画●一般社団法人Granny Rideto 編集●葛西淳子・桃生和成(一般社団法人Granny Rideto) デザイン●伊瀬谷美貴(interagire)

来年のお米も
お楽しみに！

